

## 海と山が醸成するアジアの文化

竹尾 茂樹

当プロジェクトにかかわるこれまでの研究活動は大きく二つに分かれる。一つは、本研究プロジェクトのテーマに関する文献研究で、二つはフィールド調査である。

文献研究においては、大木は日本における代表的な山の文化である「またぎ」に関する資料や文献を収集し、「またぎ」の文化とその歴史的な変遷について研究した。おおざっぱに言って、伝統的なマタギのしきたり（儀礼やマタギ独特の言葉など）を知っているのは、せいぜい大正期の初めまでに生まれた世代までで、それより若い世代は「今のマタギは娯楽だから」といわれるほど、様態が変わってしまった。第二次世界大戦を境に、戦後のマタギのあり方はさらに大きく変化し、かつての神秘性、宗教性はほとんど消失していった。銃器の発達で、もはや村田銃は影をひそめ、ライフルの時代になった。大きな歴史的流れとしてみると、伝統的なマタギは次第に農民化の道をたどり、狩猟は副業となっていった。そして大正期を通じてマタギは伝統的な猟師から「ハンター」へと変貌していった。以上が、マタギがたどった大まかな流れである。

文献研究としては、山の文化と海の文化とを結ぶチャンネルとして川の舟運の重要性に着目し、日本における河川交通の研究を行った。この研究からは、東北から関西地域までの主要河川のほとんどは、かつて舟運があり、海と内陸世界とは川によって緊密に結びついていたことが明らかになった。なお、大木はすでにスマトラ島における河川交通の歴史を研究し、そこから東南アジアにおける海と山の文化がどのように交流し、どのような新たな文化が醸成されたかを論文として発表している。

フィールド調査としては、大木・竹尾・齋藤が2010年10月に、山形県の最上川の調査を行った。その最初の目的は、最上川の舟運における最上流の河港を確認することであった。文献によればそれは、米沢市に近い「糠の目」であった。糠の目では、確かにここが最上川の最上流にある河港（河岸）であることを記した石碑と説明の看板を確認した。ここを起点として、順次、文献に登場する河港を確認しつつ下流に向かって調査を続けた。

かつての大きな河岸が現在の町の基礎となった事例もたくさんある。一つは寒河江であり、ここは紅花の産地でもあった。紅花で財を成した堀米家の屋敷が現在は資料館となっている。ここで紅花を介した河川交易の実態を知ることができた。特に興味深いのは、この山形の山中に京都の雛人形をはじめ、都の文物が多数持ち込まれたことである。江戸時代には、高台にあるこの屋敷から、最上川を上下する舟の帆が見えたそうである。また、昭和2年生まれの子供の頃、人が舟で煮炊きする煙が見えたという。

寒河江から左沢にかけての地域には数本の支流が本流に合流する地点に位置している。上記の

ガイドによれば、江戸時代までは、毎年のように河が氾濫し、新しい土砂が運ばれてきた。これは結果的にこの地域に客土する効果を持った。紅花は連作ができないので、この客土は紅花栽培にとって不可欠であった。しかし、現在は支流の上流部で護岸工事が進み、新しい土が得られないので、紅花栽培はできなくなってしまったという。実際、現在ではこの地域でもほとんど紅花は栽培されていない。

寒河江はまた、仙台→山形→出羽三山参りの中継点でもあり、最上川の舟運ルートと出羽三山参りの陸路とが交差する場所でもあり、寒河江には慈恩寺という、立石寺（山寺）とならんで東北の仏教における二大拠点のひとつが存在する。これらの意味でも寒河江は最上川上流部の重要な場所であった。

次に大きな河岸は大石田で、現在では河岸が護岸されているので、かつての船着場の面影はないが、町そのものが当時の繁栄を思い起こさせる。文献によれば、江戸時代には、ここに舟番所があり代官所があった、航行する大小の船の積み荷などを検査していた。こうして現在私たちは、どれほどの量の商品が最上川の舟運で運ばれていたかの詳細を知ることができる。上流からは紅花、青芋（あおそ）、絹、米、蠟が酒田経由で北前船、とりわけ西回り船で京都・大阪方面に送られた。海からは、塩、塩乾魚、古着、京都の雛人形、その他日用雑貨が川を經由して内陸にはいつてきていた。

松尾芭蕉は本愛母で舟に乗り、清川で下船して出羽三山参りを行った。これは、いわゆる「芭蕉の道」であるが、当時、地元の裕福な商人や文人が彼を接待し、交流を深めた。寒河江も清川も最上川の河川ルートと出羽三山参りの参道とが交差する地点にあり、多くの人を訪れた。このような事情も、舟運による文物の交流に加えて、山中の最上川流域の人々に外部の文化をもたらす重要な背景となった。

酒田の経済的繁栄を支えた大きな要因の一つは、庄内米の輸出であったが、その一部は最上川の舟運によって上流から運ばれてきた米であり、くわえて紅花をはじめとする特産品であった。最上川の舟運と、北海道と京都・大阪を行き来する船の海上ルートとが酒田で接合され、山の文化と海の文化との交流がより一層豊かになったのである。

齋藤は村井吉敬『ぼくが歩いた東南アジアー島と海と森と』（コモンズ）の書評を本学国際平和研究所紀要 PRIME 33 号（2011 年）に発表し、70 年代半ばから 2000 年代までにインドネシアやタイなど東南アジアを歩いた間の風景や歴史、ツーリズム開発による地元住民の暮らしの変化などをつぶさに見てきた村井の仕事を位置づけた。70 年代の「開発の時代」から現代にいたるまで東南アジアを定点とし、エビ、ナマコ、バナナなど交易で重要な産物や、ODA が実施されている現地や自然災害地などの訪問を通して市民・住民レベルの視線で、アジアにおける平和の構築の現場を見つめてきた記録である。

森本は従来の研究テーマであるヒマラヤの環境と社会の現地調査を行った。ネパール北西部ヒマラヤに位置するマナンは今でも車道や電線、電話線が十分に発達しておらず、外部から隔離したような「孤立した村」に見えるかもしれない。しかしながら、その資源の制限された環境の中

で生きていくためには、外部に経済手段を求めねばならず、マナンの人々は古くから国境を越えて交易・貿易活動を展開してきた。マナンの社会は、ネパールの近代化やアジア地域のグローバル化の過程と無関係ではなく、そこに様々な機会を見出し、巧みにとらえながらネットワークをトランスナショナルに拡げてきた。このネットワークは不可逆的に進行するのではなく、バンコクや香港でのビジネスが低迷したらネパールで起業し、また車道の通じていない村に戻ることも可能な動きを生み出すものである。

他方で、化石燃料の輸送が困難で他地域のように近代化を導入できないマナンでは、トレッカーの需要に応じて、環境にあった合理的な技術を外部から導入することで、生活の近代化を図ろうとしている。具体的には、外部からの支援を積極的に導入し、ソーラーパネルやマイクロ hidroプロジェクトによる発電、太陽熱温水器、ソーラークッカー等の利用により、その場にある資源を利用しつつ、近代的なファシリティを整備している。

このマナンをめぐる社会や環境の変化は、西欧近代的世界が中心から周辺にひとしなみに、不可逆的に拡がっていく印象を与えるグローバル化とは、また別のグローバル化（変化）の在り方を提示するものといえよう。

竹尾は上記の最上川流域調査に加えて、従来の沖縄県の島嶼地域のフィールド調査を継続して行った。地域は7月および10月に八重山郡西表島、5月に宮古島である。その成果については、「安保体制のもとで沖縄を語ること」（本学国際平和研究所紀要 PRIME 33号、2011年3月）および「大国の領土争いに巻き込まれる少数民族」（オルタ 2011年3-4月号 アジア太平洋資料センター）に発表した。

※本報告書は、国際学部附属研究所共同研究「海と山が醸成するアジアの文化」の中間報告書である。